



「1970年前後の占領史研究
とその周辺」 天川 晃 氏



「プランゲ・ネットワーク」
巽 由佳子 氏



「プランゲ・ネットワーク」研究会風景

プランゲ・ネットワーク

巽 由佳子

※本稿は、下記日時・場所にて、開催された研究会「プランゲ文庫の概要、現況、今後の方針」における報告・質疑応答の記録である。

開催日時：2015年2月17日 15:00～16:30

場所：国立国会図書館東京本館 新館3階人事課大会議室

講師：巽由佳子

メリーランド大学プランゲ文庫室長。

メリーランド大学博士課程、ジョージワシントン大学日本資料センター室長を経て、2014年6月より現職。

こんにちは。メリーランド大学プランゲ文庫室長の巽由佳子と申します。本日はお忙しい中、おいでいただきありがとうございます。今回はプランゲ・ネットワークというタイトルで、プランゲ文庫がどのような外部の組織や個人の方と連携があるのか、また連携がいかに大切なことかがお分かりいただけたらと思っています。

連携という話なので、2つに大きく分けました。1つめは、メリーランド大学内でプランゲ文庫と関係があるところ、2つめはそれ以外、外部と表現しましたが、それぞれお話したいと思います。最後に今後の展望についてまとめられたらと思います。こういう話をする中で、プランゲ文庫の利用者像、利用目的、メディア掲載、研究状況についてもお話をします。

I メリーランド大学内のネットワーク

1 図書館関連部署及び他のスペシャルコレクション

まず、メリーランド大学内での連携が3つ（大学アーカイブ、図書館情報学大学院、関連学部）あります。

ゴードン・W. プランゲコレクションは、大学の図書館の中でスペシャル

コレクションに属しています。ウェブサイト¹⁾を見ていただきたいのですが、メリーランド大学の図書館は、まず本館にマッケルディン・ライブラリーがありまして、それ以外に7つの分館があり、その中の1つに、ホーンベイク・ライブラリーがあります。その中にプランゲ文庫を含むスペシャルコレクションがすべて入っています。プランゲ文庫としては、ホーンベイク・ライブラリーの中の他のスペシャルコレクションとの連携が当然密なのですが、その中で特に親密に、といいますか、連携して働いている組織を2つ紹介したいと思います。

1つ目が大学アーカイブです。メリーランド大学で発行されるすべての資料、ドキュメント、書類は全部大学アーカイブに保存されています。たとえば学生の成績表や応募書類、先生が書いたペーパー、個人的な手紙など、すべてです。この中に、当然ですがプランゲ博士のペーパー²⁾が入っています。プランゲ文庫を訪れる方、質問がある方はプランゲ博士のことにもご興味がある方が多いです。プランゲ博士はGHQで働いていらっしゃったので、そのことに関して、占領軍に関する研究をされている方からのお問い合わせがあります。プランゲ博士関連の資料はプランゲ文庫とは全く別に大学アーカイブに保管されていますので、そちらをご案内しています。一番私たちに関係するのはシリーズ4、'G-2 Historical Division: MacArthur, the Korean War, and the Occupation of Japan'で、サイト上でどこに何があるか書いてあります。本当によく使われているのは、プランゲ博士とメリーランド大学の当時のバード総長とのやり取りで、ぜひCCD（民間検閲部隊）のドキュメントを送りたい、などのやり取りが頻繁に行われています。プランゲ博士はとても筆まめな方で、ほぼ毎日手紙を書いていらっしゃいます。当時の手紙の書き方は、まずhand writingで下書きをして、それを自分でタイプ打ちしています。手書きとタイプ打ちのものが残っていて、手書きのものは読めない場合が多いのですが、タイプ打ちしたのがあると、このように読むのか、ということが分かって面白いです。

2つ目として、労働史関係の資料があります。土地柄、ワシントンDCに近いので、労働運動があったりするとその報告書やそれに関する書類が多く集められています。近々シンポジウムが予定されており、一緒にレセプション

1) <http://www.lib.umd.edu/>

2) <http://digital.lib.umd.edu/archivesum/actions.DisplayEADDoc.do?source=MdU.ead.histms.0193.xml&style=ead>

ンとツアーを行うことになっていますので、ご紹介します。‘Organizing for Power and Workers’ Rights in the 21st Century’³⁾ というタイトルで、メリーランド大学歴史学部と図書館が共同で行うシンポジウムで、最後にレセプション・ツアーということで、プランゲコレクションに来ていただくことになっています。どのような資料を見ていただくかといいますと、ジョン・ハロルド文書というのが私たちにとって貴重な資料で、労働史関係の資料を見ていただきます。ジョン・ハロルドはGHQ労働課に勤めておられ、GHQの労働関係の資料がとても多いです。これはドキュメントの1つですが、紙芝居になっていまして、労働者の権利や労使関係などを紙芝居を使って紹介するという貴重な資料で、紙芝居の枠まで残っているものです。これをシンポジウムでお見せしたいと思っています。

図書館関連部署について、スペシャルコレクション以外にも多くの部署と関連しており、助けてもらっています。例えばデジタルサービス課には、私たちが作成したメタデータを大学のウェブサイトにはアップロード、更新してもらっています。また、壁新聞などの大型資料のスキャンは、デジタルサービス課を通じてしてもらっています。また、保存課にもお世話になっています。ご存知のとおり、プランゲ文庫の資料は古いもので、保存状態に細心の注意を払っても劣化していくものですので、どのようにしたらよいか相談をするところです。広報課は大学の広報専門部署で、資料やイベントの紹介をしてもらっています。

2 図書館情報学大学院

メリーランド大学内の連携の2つ目、図書館情報学大学院との連携についてお話ししたいと思います。ここでは、プランゲ文庫というよりは図書館全体との交流があります。なぜかといいますと、日本語にしづらいのでこのまま書きましたが、Graduate assistantshipという大学院生のためのポジションが図書館内に用意されています。この学生さんたちは将来のアーキビストや司書の卵で、就業機会を図書館で得たいという方が当然多いので、そういう方に働いていただいています。そういう方々にオリエンテーションをしたりツアーをしたりしてプランゲ文庫を紹介しています。また、図書館内で働いていなくても、学生の必修科目の一つとしてフィールドワーク、インターンシップという形で一緒に働くという場合もあり、そういう方にもプランゲ文

3) <http://newamerica.umd.edu/conferences/spring2015.php>

庫を紹介するチャンスがあります。

研究成果の分かち合いというのも、密に連絡を取っていきまして、3月にシンポジウムがありますので、それをご紹介したいと思います。‘Americana 2015: Collections of Curiosity’⁴⁾というタイトルで、これは学生で将来アーキビストになりたい人たちが作っている Student Archivists at Maryland⁵⁾という団体で、ここに招待されまして、‘Documenting Occupied Japan: The Gordon W. Prange Collection’ というタイトルでプレゼンテーションをすることになっています。

3 関連学部

大学内の連携の最後に、関連学部との交流についてお話ししたいと思います。

1番目は、東アジア言語文化学部です。この先生である Dr. Michele Mason がプランゲ文庫の良き理解者で、頻繁に来てもらっている常連です。彼女の専攻は占領期ではないのですが、なぜプランゲ文庫との交流があるかといいますと、授業で学生を連れてきてくれるからです。‘Readings in Japanese culture studies’ というクラスで、数はさほど多くありませんが、日本語を専攻している学生がいます。その学生たちがとっているクラスで、先生が授業の一環として学生を連れてきてくれます。私たちは事前に先生と相談して、クラスで学生たちが学習したことに関連した資料を取り出しておいて、それを紹介しています。クラスが終わったあとに、学生たちがどう感じてくれたのか、何を学び取ってくれたのかを紹介するために、プランゲ文庫のブログに感想文⁶⁾を載せています。ぜひブログに登録して読んでいただければと思います。この Michele Mason 先生は研究会を4月に行う予定で、タイトルは ‘Resituating of Nagasaki in time and space’⁷⁾ で、長崎の被爆体験を再考するというテーマで研究会を開かれます。これは（ワシントン）DC 近郊の研究者15名程度を招待して、一日ワークショップを行います。プランゲ文庫の部屋の前に広いロビーがあり、そこでワークショップをしていただきますので、私たちも全面的に協力します。長崎関係の資料もプランゲ

4) <http://www.eventbrite.com/e/americana-2015-collections-of-curiosity-tickets-15431287396>

5) https://www.facebook.com/studentarchivists?_rdr

6) <https://prangecollectionjp.wordpress.com/2014/01/12/>

7) <https://globalmaryland.umd.edu/sites/default/files/Nagasaki.pdf>

文庫に多くありますので、それを出しておいて、ツアーをしたり、展示をしたりする計画です。

次に、芸術史学部、英語では Art History といいますが、ここには、まさに占領期の日本のアートを専攻している Dr. Alicia Volk⁸⁾ 先生がいらっしゃいます。彼女を紹介するページに、プランゲ文庫でリサーチしているということが一番に出ています。彼女は今、本を執筆中で、プランゲ文庫の資料が中心となった研究です。“*Democratizing Japanese Art, 1945-1960*”、この本は、日本の女性に特に焦点をあてており、女性の芸術家が占領期に民主化を果たすためどのような役割を演じたかについて書いています。いま執筆中で、2年後に出版される予定です。この先生もクラス訪問をしてくださっており、去年の秋学期には ‘Japanese Art: Colonialism or/and Occupation’ という、まさに私たちにはぴったりのタイトルのクラスを教えていらっしゃいまして、来てくださいました。

メリーランド大学図書館のスペシャルコレクションでは、イーオン (Aeon)⁹⁾ という、オンラインで資料をリクエストできるシステムを去年の8月から導入しました。このシステムの良いところは、利用者アカウントを作ってもらって資料を請求してもらうと、請求資料の記録がすべて残ることになっており、プランゲ文庫でどのような資料が頻繁に利用されているか統計を出すのに役立ちます。私のアカウントの例ですが、‘Relates’ というところにクラス名を入れておくと、これまでご紹介したクラス、Dr. Alicia Volk 先生の Art History や、オープンハウスをしたり、先ほどの日本語クラスの資料があったり、History のクラスだったり使ったものが見られます。

次に歴史学部です。2点、いままでの東アジア言語文化学部、芸術史学部と違って特徴的なのは、プランゲ文庫に基づく研究への助成金を共同で（図書館と歴史学部で）出しています。この助成金への応募についての宣伝を国立国会図書館でも紹介してください、とお願いしてカレントアウェアネスに載せていただいています。¹⁰⁾ Japan Researcher Award といって、1999年から始まりました。年に1人か2人、多い時で3人、1人に1,500ドルずつ支給して、プランゲ文庫の資料を使ってリサーチしてくださる方への助成金です。

8) [http://arthistory.umd.edu/faculty/Alicia Volk](http://arthistory.umd.edu/faculty/Alicia_Volk)

9) <https://hornbakelibrary.wordpress.com/tag/aeon/>

10) <http://current.ndl.go.jp/node/29510> (2015-2016)

1999-2000	Joanne Izbicki	"Orphans in Postwar Japan"
1999-2000	Ben Dorfman	"Local Religious Organizations in Postwar Japan"
1999-2000	Kristine Dennehy	"Memories of Colonial Korea in Postwar Japan"
2000-2001	Lori Watt	"Post-World War Two Repatriation in Japan, 1945-1958"
2000-2001	Michael Molasky	"Reading Jazz in Postwar Japan"
2001-2002	Sayuri Shimizu	"Japanese Baseball under U.S. Occupation, 1945-1952"
2001-2002	Sonia Ryang	"Japan's Emergence as an Anthropological Field"
2002-2003	Aaron Skabelund	"Japan's Postwar Military, 1945-1989."
2002-2003	Miho Matsugu	"Kawabata Yasunari's Snow Country as a National Narrative of the Occupation: 1945-1948"
2002-2003	Helen Macnaughtan	"Female Labor and the Allied Occupation of Japan"
2003-2004	Kenji Ito	"Popular Perception of Science and Technology in Postwar Japan"
2003-2004	Vera Mackie	"A Cultural History of the Body in Modern Japan"
2004-2005	Lee Pennington	"Wartorn Japan: Disabled Veterans and Society, 1931-1952"
2004-2005	Julia Adeney Thomas	"Photography and Democracy: Between History and Sex in Occupied Japan"
2005-2006	Alicia Volk	"Democratizing Japanese Art, 1945-1960"
2005-2006	Takashi Nishiyama	"Former Military Scientists and Engineers, 1919-1964," and "Labor Activism in the Japan National Railways, 1945-1955"
2006-2007	Maki Umemura	"The Pharmaceutical Industry in Japan since 1945"
2006-2007	Kyoko Omori	"The Culture of Japanese Vernacular Modernism, 1920-1950"
2007-2008	Ann Sherif	"The Influence of Progressive, Leftist, Religious and Regional Publishers on Art, Activism and Academia During the Occupation"

2007-2008	Erik Esselstrom	"The Politics of Thought Crime in Wartime and Occupied Japan"
2008-2009	Aiko Takeuchi	"Social Discussions over Female Reproduction in Postwar Japan"
2008-2009	Franziska Seraphim	"Public Responses to the Allied War Crimes Program and SCAP's Purge"
2009-2010		No awards were given.
2010-2011	Justin Jesty	"Art and Social Movements in Postwar Japan, 1945-1960"
2011-2012	Jolyon Thomas	"Japan's Preoccupation with Religious Freedom, 1890-1947"
2011-2012	Ryan Holmberg	"Ten Cent Manga: American Comics and the Rise of Gekiga"
2011-2012	Charlotte Eubanks	"Archival Memory: The Marukis and the Politics of Visual Culture in Trans-War Japan"
2012-2013	Jessamyn Abel	"Locomotives of Postwar Recovery: Development of the Bullet Train"
2013-2014	Emer O'Dwyer	"Searching for 'Truth' in Occupation-Era Magazines"
2013-2014	Deokhyo Choi	"Crucible of the Post-Empire: Decolonization, Race, and Cold War Politics in U.S.-Japan-Korea Relations, 1945-1952"
2013-2014	Julia Bullock	"Coeducation in Japan under Allied Occupation"
2014-2015	Shota Ogawa	"Imagining Natural Color: Impact of Color Film on Occupation-era Paper Media"
2014-2015	Vanessa Ward	"Publishing Progressive Thought in Occupied Japan"

受賞者名と研究タイトルを見ると、どういうことが焦点を当てられているか参考になるのではないかと思います。

もう一つ、この研究助成金に関して、歴史学部とは研究会の共催を昨年初めて行いました。昨年の助成金の受賞者で、オハイオ州にある Oberlin 大学の先生に講演していただきました。夏にプランク文庫に来て研究をされて、秋にもぜひ来たいとおっしゃってくださったので、ぜひワークショップをしてくださいということで、快くお引き受けいただきました。“Exposed!:

'Disclosure Magazines' in Post-Surrender Japan”¹¹⁾ ということで、暴露本と先生はおっしゃっていましたが、センセーショナルなタイトルで、真実はこうだ、といって満洲事変の真実を暴く、というような雑誌がプランゲ文庫にはたくさんあるのだそうです。昨年の受賞者なのでまだ初期の段階なのですが、これからまた戻ってきてくださる可能性があると思います。

II 外部関係者

1 公共図書館等

次に外部関係者との連携の話に移りたいと思います。私たちにとっては言うまでもなく、国立国会図書館とのプロジェクトが一番大きな連携になっています。ご存知だとは思いますが、ずっと関係が続いておりまして、1992年から正式なプロジェクト、雑誌のマイクロ化が始まり、そのあと新聞のマイクロ化を進めて、2005年から‘Book Reformatting Project’ということで児童書のデジタル化を済ませ、一般図書に今移っているという段階です。昨年までの2年間は検閲された新聞記事のデジタル化を行っていましたが、これが終了しましたので、また一般図書に戻ります。

国立国会図書館との連携以外にも、公共図書館等とも連携させていただくことがあります。ひとつめが、長崎県立長崎図書館で、横手一彦先生（長崎総合科学大学教授）が、プランゲ文庫の文学に関してとても詳しく研究されています。長崎県立長崎図書館で昨年夏にプランゲ文庫資料を使った展示会¹²⁾をされました。プランゲ文庫にとっても貴重な機会なので紹介させてほしいと言ったら、快く引き受けてくださいまして、ここに紹介しています。何を使われたかといいますと、『雅子斃れず』というよく知られた本なのですが、プランゲ文庫にはその原本とゲラが入ったものと検閲処理をしたものと最終的に発行されたもの、すべてがそろっている、そういう意味で貴重な資料です。

2点目は、小松左京ライブラリです。これはけっこう新聞でも大々的に報道していただいたので、ご存知の方もいらっしゃるかと思います。小松左京氏のデビュー作を、国立国会図書館のデジタルコレクションで、いち小松左京ファンの方が見つけられまして、原本がプランゲ文庫にあるということで、取材を受けました。結果的に、取材してくださったところがぜんぶ掲載された新聞をお送りいただいたのですが、数えたら全国紙3紙、地方紙17紙

11) <http://history.umd.edu/events/emerg-odwyer-lunch-conversation>

12) <https://prangecollectionjp.wordpress.com/2014/07/23/>

ありました。小松左京ライブラリも、ぜひプランゲ文庫を紹介したいとおっしゃっていただきましたので、小松左京ライブラリのウェブサイト¹³⁾でも紹介していただきました。この報道の後、これに関して、「プランゲ文庫の児童書デジタル化」というタイトルで明治大学の宮本大人先生が記事を書いてくださいました。これも取材して下さったところが後で記事を送って下さって、地方紙7紙に掲載されました。

2 資料寄贈者

次に、資料寄贈者についてお話ししたいと思います。プランゲ文庫には、プランゲ博士が収集された資料以外にも寄贈を受けています。どういう方から来るかといいますと、かつてGHQ/SCAPに従事していらっしゃった方やそのご遺族の方から、ぜひプランゲ文庫に寄贈したいということで持ってきてくださいます。その一部を紹介¹⁴⁾したいと思います。

すべてGHQのかなり上のほうのポジションについていた方ですので、本当にいろいろな資料が残っています。先ほど申し上げたジョン・ハロルド文書も、この寄贈文書の一つです。チャールズ・ケーデイス（民政局長）というのは憲法の草稿に関わられた方ですので、いま話し合いが進んでいますので、そういう意味では貴重な資料ではないかと思います。

これ以外にも、ここには出ていない、いま処理中の寄贈文書もあり、その一つがデルノア・ペーパーという文書です。ビクター・デルノアさんという長崎県に3年間勤めていた方がおり、お亡くなりになりましたが、その娘さんが寄贈してくださいました。娘さんは長崎生まれです。このデルノア・ペーパーの特徴は、感謝状が多いことです。どのようなところからデルノアさんが感謝状をもらっているかといいますと、長崎県知事、長崎市長、長崎の地元の産業機関、会社関係の方から、本当に長崎が大変な時期に助けて下さってありがとう、という文章が本当に山のようにあります。デルノアさんが1949年に日本を去られるときに、地元の関係者の方が、ぜひ私たちのことを覚えておいてください、ということで新聞記事を切り貼りし、アルバムに貼って、それは日本語ですから英文に訳してプレゼントをされています。地元の方の声が分かる貴重な資料です。なぜこのデルノアさんの話をしたかといいますと、これもたくさんメディアに載りました。デルノアさんに

13) <http://sakyokomatsu.jp/info/-top/page/6/> 投稿日：2014年7月19日

14) <http://www.lib.umd.edu/prange> 「日本語」画面>「資料構成」>「英文周辺資料」

敬意を表する意味でデルノア通りを長崎県につくろう、という企画が1949年にあったものの立ち消えになったそうです。そのまま時が経ちましたが、去年、この企画が復活し、デルノア通りができて、娘のパトリシアさんが招待されて、長崎にいらっしゃいました。長崎関係の報道がすごくたくさんありまして、プランゲ文庫にも、デルノアさんに会いに来たり、デルノアさん関係の資料を見にたくさんいらっしゃいました。その関連で、さらにそのあと長崎に関連する記事が出まして、プランゲ文庫についても載っています。

3 メディア掲載

いくつか日本語でのメディアの例を挙げましたので、英語でのメディア掲載について少しだけ紹介させていただきたいと思います。

Academic Preservation Trust¹⁵⁾ というのは、アメリカの大学で貴重な資料を保存しているところで作っている協会のようなところです。メンバーが10数大学ありまして、メリーランド大学もその一つです。ここに‘Vast Japanese Collection Saved’ ということで、プランゲ文庫を紹介していただいています。

次に、ビデオがあります。これはプランゲ文庫ではありませんが、プランゲ博士は、真珠湾攻撃についてかなり書いていらっしゃいまして、“*Prange & Pearl Harbor*”¹⁶⁾ というビデオが出ています。メリーランド州の放送局では、12月8日あたりになると放映されることが多いそうです。

雑誌記事に関しては、ご存知かもしれませんが“*A Cross-Pacific Partnership*”¹⁷⁾ ということで、こちらとの共同プロジェクトのことについて書いてあります。これは私の前任者だった坂口英子さん、現在のマネージャー、エイミー・ワッサストロム、当時の司書だった嶋田健一郎さんが共同で書いていらっしゃいます。もう一つ、“*Fine Books & Collections*” で私が執筆中です。この雑誌は学術雑誌というよりは一般大衆を対象にした雑誌ですが、出版されましたらご報告したいと思います。

15) <http://academicpreservationtrust.org/>

16) <http://www.amazon.com/Prange-Pearl-Harbor-Magnificent-Obsession/dp/B003J99IAC>

17) <http://www.emeraldinsight.com/doi/pdfplus/10.1108/10650751011018473>

4 研究者

次に、個人の研究者の方々の紹介に移りたいと思います。実際にどういう方がどれくらいいらっしゃるのか、去年の例を挙げてここに数字を示しました。

2014 訪問 利用者数

	学部生	日本人 大学院生	日本人 以外の 大学院生	日本人 研究者	日本人 以外の 研究者	その他	
1月				1			
2月		1			3		
3月				3	2		
4月					3		
5月		1	3				
6月	1	1	1		2	6	
7月					3	25	
8月	3		1	2		3	
9月	9	1	1	3			
10月	8		1		2	3	
11月	11			4		2	
12月		1		2		1	
計	32	5	7	15	15	40	114

学部生が9月に9人というのは、愛媛大学から授業の一環として先生が引率して来ていただきました。10月に芸術史のクラス、11月に日本語クラスの学生さんが来ていただきました。大学院生については、日本人とそれ以外に分けると、大体同じくらいかなという気がしています。日本人以外の大学院生というのは、アメリカのアイビーリーグ、ハーバードとかプリンストンとかペンシルベニア大学あたりで、本当に日本語がよくできる博士課程の学生が占領期日本の研究をするためにプランゲにやって来ている、という方がほとんどでした。日本人研究者と日本人以外の研究者の数もちょうど半々になっています。これも、大体同じような感じかな、というのが私の日常の仕事の中での印象です。その他というのは、メディア関係の方や寄贈者を含めました。25名というのが突出していますが、たまたまスペシャルコレクションに中国人の大学の先生が訪問され、せっかくなので見ていただくという

話でご案内しました。毎年だいたい100人を超えるか超えないかという訪問者だということです。

研究内容について、統計を全部集めて、というのは難しいですが、さきほど申しました助成金受賞者はプランゲ文庫の資料をこのように使ってこのような研究をする、ということが明確に決まっている方ばかりですので、かなり出版につながっています。先ほどのリストは32人いますが、今年2人はまだ来ておらず、また過去5～6名の方を除いてご紹介しました。タイトルを見れば大体内容がお分かりいただけるのではないかと思います。

英語研究論文:助成金受賞者

名前	受賞年	書名	出版年
Franziska Seraphim	2008-9	War Memory and Social Politics in Japan, 1945-2005	2008
Erik Esselstrom	2007-8	Crossing Empire's Edge: Foreign Ministry Police and Japanese Expansionism in Northeast Asia	2008
Ann Sherif	2007-8	Japan's Cold War: Media, Literature, and the Law	2009
Maki Umemura	2006-7	The Japanese Pharmaceutical Industry: Its Evolution and Current Challenges	2011
Alicia Volk	2005-6	Democratizing Japanese Art, 1945-1960	2017
Vera Mackie	2003-4	Feminism in Modern Japan: Citizenship, Embodiment and Sexuality	2003
Helen Macnaughtan	2002-3	Women, Work and the Japanese Economic Miracle: The case of the cotton textile industry, 1945-1975	2004
Aaron Skabelund	2002-3	Empire of Dogs: Canines, Japan, and the Making of the Modern Imperial World	2011
Sonia Ryang	2001-2	Love in Modern Japan: Its Estrangement from Self, Sex and Society	2009
Sayuri Shimizu	2001-2	Transpacific Field of Dreams: How Baseball linked the United States and Japan in Peace and War	2012
Lori Watt	2000-1	When Empire Comes Home: Repatriation and Reintegration in Postwar Japan	2010

“*War Memory and Social Politics in Japan*”¹⁸⁾ この方の本は、戦争の記憶がどのように構築されてきたか、というものです。ここに紹介する本は大学の出版社から出ていることが多いです。“*Crossing Empire's Edge: Foreign*

18) Seraphim, Franziska, *War memory and social politics in Japan, 1945-2005*, Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center, 2006.

*Ministry Police and Japanese Expansionism in Northeast Asia*¹⁹⁾ は、外務省が外地にいる日本人と植民地の居住者とをどのように政策として区別してきたか、という内容の本です。次は、“*Japan’s Cold War: Media, Literature, and the Law*”²⁰⁾ という本で、冷戦がどのように構築されてきたか、という研究内容です。次は、“*The Japanese Pharmaceutical Industry: Its Evolution and Current Challenges*”²¹⁾ で、これは製薬産業がどのように発達してきたか、という研究の内容です。“*Democratizing Japanese Art*” というのは、先ほど申し上げました Alicia Volk 先生はメリーランド大学に勤められる前は助成金の受賞者でもありました。Vera Mackie さんの “*Feminism in Modern Japan: Citizenship, Embodiment and Sexuality*”²²⁾ ですが、この方はフェミニズムといえば Vera Mackie というくらい有名な先生です。次は、“*Women, Work and the Japanese Economic Miracle: The case of the cotton textile industry, 1945-1975*”²³⁾、これは女性と経済成長、特に繊維業界を通してどのように発展したかを書いています。“*Empire of Dogs: Canines, Japan, and the Making of the Modern Imperial World*”²⁴⁾ というこの本は、犬というのが近代の日本でどういう地位を占めるようになったかという、なかなかユニークな研究です。犬というのはペットというだけではなくて、社会階層を表す動物である、それを飼っているということが飼っている人にとってどういうステータスを表すかを研究していらっしゃいます。“*Love in Modern*

19) Esselstrom, Erik, *Crossing empire’s edge : Foreign Ministry police and Japanese expansionism in Northeast Asia*, Honolulu : University of Hawai’i Press, c2009.

20) Sherif, Ann, *Japan’s Cold War : media, literature, and the law*, New York : Columbia University Press, c2009.

21) Umemura, Maki, *The Japanese pharmaceutical industry : its evolution and current challenges*. London : New York : Routledge, 2011.

22) Mackie, Vera C., *Feminism in modern Japan : citizenship, embodiment, and sexuality*, Cambridge ; New York : Cambridge University Press, 2003.

23) Macnaughtan, Helen, *Women, work and the Japanese economic miracle : the case of the cotton textile industry, 1945-1975*, London ; New York : RoutledgeCurzon, 2005.

24) Skabelund, Aaron Herald, *Empire of dogs : canines, Japan, and the making of the modern imperial world*, Ithaca : Cornell University Press, 2011.

Japan: Its Estrangement from Self, Sex and Society"²⁵⁾、これは、ロマンチックラブ、異性間の愛情がどのように構築されてきたか、それは社会現象としてどのように表れているかについて書かれた本です。“*Transpacific Field of Dreams*"²⁶⁾、これは野球の本で、アメリカから輸入された野球が日本でどのように作り変えられていくか、という過程を研究された本です。写真を見ていただくと分かると思います。次は、“*When Empire Comes Home: Repatriation and Reintegration in Postwar Japan*"²⁷⁾、これは引揚者がどうやって帰ってきたあとに日本の社会に復帰していくかを書いた本です。

当然、助成金受賞者だけがプランゲ文庫や占領期の研究をしていらっしゃるわけではなくて、その他にもありますので、簡単に紹介しておきます。これは占領期検閲研究の例ですが、この修士論文“*Publication and Censorship of Popular Song During the Allied Occupation of Japan, 1945-1949*"²⁸⁾というのは、メリーランド大学でEthnomusicology、民俗音楽学を専攻する学生がしまして、彼がプランゲ文庫の資料を使って、当時の流行歌がどういふように検閲されたかという研究をして修士論文を書いたものです。こういう歌の本もたくさんあります。彼は今、そのままメリーランド大学で博士課程に進学していますので、さらにこの研究をしています。もっといろんな資料を使ってこのテーマを掘り下げる、という形ですので、まだその段階ではないですが、これから来てもらえると思っています。この本、“*Negotiating Censorship in Modern Japan*"²⁹⁾は、占領期に限らず、検閲に関する本です。いくつかチャプターがあつていろんな先生が書いておられますが、この中で2つ占領期に関しては取り上げられています。この Jonathan E. Abel,

25) Ryang, Sonia, *Love in Modern Japan*, London ; New York : Routledge, 2009.

26) Guthrie-Shimizu, Sayuri, *Transpacific field of dreams : how baseball linked the United States and Japan in peace and war*, Chapel Hill : University of North Carolina Press, c2012.

27) Watt, Lori, *When empire comes home : repatriation and reintegration in postwar Japan*, Cambridge, MA : Harvard University Asia Center, 2009.

28) <http://drum.lib.umd.edu/handle/1903/15408>

29) edited by Rachael Hutchinson, *Negotiating censorship in modern Japan*, Abingdon, Oxon ; New York, NY : Routledge, 2013.

“*Redacted: The Archives of Censorship in Transwar Japan*”³⁰⁾ というこの本は、これも検閲に関するものですが、戦前の内務省の検閲から戦後の占領期の検閲まで、Transwarということで、戦前・戦中・戦後すべてにわたって検閲の移り変わりを書いています。‘検閲・メディア・文学—江戸から戦後まで’³¹⁾、この本も、いろんなメディアにおける検閲ですが、この本の面白いところは、バイリンリಂಗルになっていまして、こちらからは日本語、裏からは全く同じ記事が英語で書かれています。

他にも2、3、本ではない別の例を挙げてみました。Malia McAndrew という方の去年出たタイトル、“*Beauty, Soft Power, and the Politics of Womanhood During the U.S. Occupation of Japan, 1945-1952*”³²⁾ は、女性雑誌ですね、それもたくさんありますが、女性雑誌の西洋人のイメージが日本でいかに浸透していったか、それがいかに理想の女性像として描かれていたかを研究されたものです。PDFで手に入りますので、参考に見てみてください。ひとつ、ちょっと面白い例をご紹介しますとおこうと思います。“*Books As Weapons: Propaganda, Publishing, and the Battle for Global Markets in the Era of World War II*”³³⁾ というこの本ですが、これは占領期日本を焦点にあてた本ではなく、この方がアメリカの出版業界の歴史を研究されていて、その成果をこの本にしていらっしゃいます。面白いのは、アメリカの出版業界が日本の占領期とドイツの占領期に与えた影響を比較対照されていて、新しい視点を学ぶという上では貴重な資料だと思います。

Ⅲ 今後の展望

最後になりますが、簡単に今後の展望についてお話ししたいと思います。これまでお話ししてきた大学内及び大学外との連携は当然続けていきたいと思っておりますが、さらに、3年後に迫っていますが、2018年3月にワシントンDCで、CEAL（東アジア図書館協議会）及びアメリカのAAS（アジア研

30) Abel, Jonathan E. *Redacted, the archives of censorship in transwar Japan*, Berkeley: University of California Press, [2012].

31) 鈴木登美・十重田裕一・堀ひかり・宗像和重編『検閲・メディア・文学—江戸から戦後まで』新曜社, 2012.

32) <http://works.bepress.com/malia/3/>

33) Hench, John B., *Books as weapons: propaganda, publishing, and the battle for global markets in the era of World War II*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 2010.

究協会)、一番大きな学会ですが、これらがワシントンDCで開かれますので、その時にぜひプランゲ文庫の研究成果を発表したいと考えています。ご協力いただければ、国立国会図書館との共同プロジェクトの成果、日本側から見たプランゲ文庫、アメリカ側から見たプランゲ文庫、ということを発表できればと考えています。どうしてもここでプランゲ文庫の発表をしておきたいと思っている理由は、その翌年の2019年に関係しています。2019年にプランゲ文庫40周年を迎えます。先ほどお話ししておりましたリサーチ助成金制度の発足から20周年という記念すべき年でもあります。ですからここで、シンポジウムなり、占領期研究の著名な方を招いてワークショップをするなり、記念行事をぜひしたいと思っています。そのためにも、2018年にもぜひ発表をしたいと思っています。このような明確なビジョンを私たちは持っていません。なぜかといいますと、メリーランド大学の図書館長が替わることになっています。人選が進んでいまして、年内には決まるのではないかと考えています。

最後になりますが、私の展望をお話ししたいと思います。今回ご招待いただいて、私はとても楽しみにしていましたが、こちらに伺うのは実は初めてではありません。2007年に何度も足を運びました。その当時、私はメリーランド大学の大学院で研究をしていました。研究テーマは日本の20世紀初頭の高等教育史でした。アメリカの大学で日本史をやっていたので、資料を集めるという面ではとても苦労しました。アメリカの大学は常々素晴らしいと思っていますが、一次資料を集めるのは大変で限界があります。そんなときに国立国会図書館に来て、閲覧を希望するとなんでもすぐに出ることが本当にありがたく、うれしくて感激したことを今でもよく覚えています。ですから、プランゲ文庫のスタッフという意味でもありますが、ここに資料がある、すべてが手に入るということの意義とか意味とか大切さを知る利用者の一人として、ここでプランゲ文庫の資料が全部みられる、さらには、プランゲ文庫の資料が、いつでもどこからでも見られる、ということを目指して、国立国会図書館と協力して進めていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

IV 質疑応答

(会場) 私どもでは、今年出す本に、プランゲ文庫に所蔵されている、東京で出版された大新聞、いわゆるメジャー新聞を除くメディアを調査し、掲載

させていただく予定で、大変助かっております。今日講演をうかがったうえで、3点ほどお聞かせください。1点目は、Dr. Volkさんがプランゲ文庫の中を見ている写真を拝見しましたが、ドキュメントではなくモノ資料のように見受けられました。そういった、紙ではない資料をお持ちなのでしょうか。2点目は、関連研究をたくさんご紹介いただきましたが、そういった情報をどのように収集されているのでしょうか。3点目は、プランゲ文庫全体でどの程度目録化が進んでいるのでしょうか。

(巽) 1点目、Dr. Volkが見ている写真はプランゲ文庫ではありません。プランゲ文庫は出版物、文書のみでモノはありません。2点目は、まず、助成金を受賞された方は、報告を随時していただくという契約のもとに助成金を出しています。そういう意味で、出たら報告が来る、ということになります。受賞者の方はプランゲ文庫の資料を使いたい、ということがあり、資料を使っただけに2次使用届をお願いしていますので、そういう意味で連絡が入るようになっていきます。訪問者の方は、一回きり、研究に来て終わりではなくて、その後もずっとつながっていることが多いです。そういう意味で、訪問者に限って言えば、後を追っていくというのは難しいことではないです。ただ、全員が教えてくださるわけではないので、随時キーワード検索をして、出版物の調査は行っています。3点目は、国立国会図書館との共同プロジェクトを念頭に置いて、どういう図書から目録化していかなくてはならないかを考えながらやっています。児童書についてはデジタル化が終わりましたので、今後新しく始まる分野について目録化が進められています。目録化がされているか全くされていないか、という分け方はできなくて、全く未処理のものもありますし、整理はされているが目録がないものもありますし、この分野に関してはここまで済んでいる、というものもあり、全体像はなかなか申し上げにくいところがありますが、このような実情です。

(会場) そうなりますと、サーチをしたい場合は、こういうテーマを持っているのだが、ということをご相談して、その分野についてはこういう状況である、とご案内いただくことになりますか。

(巽) 随時、どういう資料がどこまで目録化が進んでいるか、整理中なので利用できない、等の情報をウェブサイトで流しています。「資料構成」や、「プランゲ文庫を訪問される方へ」等を見ただけであればと思いますが、カ

テゴリー別に分けており、新聞雑誌はマイクロ化が済んでいるのでこちらへ行ってください、とか、政治学はこう、社会科学はこう、などを出していますので、参考になるかと思います。

(司会) 全体のうち何割くらい目録化が済んでいる、というのは言いにくいでしょうか。

(巽) そうですね、どういう分け方をするかによります。全く未処理のものもありますが、それがどれくらいかは分かりません。

(会場) CCDが検閲した刊行物を持ち帰ったという面でのプランゲ文庫のカテゴリとは別に、本来のゴードン・W. プランゲ博士の仕事はGHQ、G2(参謀第二部)での歴史編纂でしたが、プランゲ博士が歴史編纂のために収集した日本側の戦前・戦中の資料があったと思うのですが、それ自体はプランゲ博士がメリーランド大学に持ち帰ったのか、あるいは行方不明になってしまったのでしょうか。

(巽) プランゲ博士の文書に関しては、プランゲ博士が書いたもの、持ち帰ったものはプランゲ文庫にはなく、大学アーカイブのゴードン・プランゲ・ペーパーになります。私たちはここの整理には関わっておらず、ユニバーシティアーキビストがやっています。私たちがご案内できるプランゲ博士のペーパーは、こちらに行って、興味があるものを見ていただく、ということになるかと思います。ただし、アーカイブのほうも、整理が済んでいるもの、済んでいないもの、紛失しているもの、などがあるかと思います。元々あったけどなくなったのか、持ち帰っていないのかなどは分かりません。

(会場) 先ほどのリストを見ますと、総長との間の往復文書などがあることは分かりますが、それ以外の収集した刊行物や文書があるかどうかは分からないでしょうか。

(巽) 私も時々プランゲペーパーを確認していますが、彼が使っていた地図や参考に使っていたであろう図書があります。そういったものをご興味の範囲で調べていただくことになります。たとえばパウルハーバーであれば、ここ

を見ていただくなど、リストの中から探していただくことになるかと思えます。私も自分に関係のあるシリーズ4以外のところは見られていません。

(会場) プランゲ文庫さんでは、FAX等での所蔵資料の複写受付をされていたかと思いますが、どういったものに対して申し込みが多いとか、全体的にどのくらいの需要があるかについて教えてください。

(巽) お問い合わせは日本の方からが多いので、プランゲ文庫に直接複写を依頼する、というよりは、国立国会図書館の資料の2次使用届が多いです。また、Aeonで複写申込みを受け付けるというシステムが始まりましたので、これから申し込みがあれば記録に残りますので、いずれご報告できると思います。今の時点では、私が来た昨年6月以降リクエストがあったことはないです。2次使用届はたくさん受け付けました。

(会場) プランゲ文庫で児童書デジタルコレクションを公開されていると思いますが、説明文に「8,000点の児童図書が所蔵されています」となっており、「全ての絵本と大部分の漫画はこのデジタルコレクションでご覧いただけます」と説明がついています。ただし、読み物も4,000点ほどあり、書誌などは公開されているようですが、学内で公開されていないということでここには読み物が出ていないのでしょうか。また、「大部分の漫画」について、漫画は何らかの事情で公開できない部分があるのでしょうか。

(巽) いくつか理由があるかと思いますが、私たちの側のメタデータ作製は終わっているが大学のウェブサイトに掲載してもらっていないというのが一番大きい理由なのではないかと思えます。担当のデジタルサービス課はプランゲ文庫だけを扱っているわけではないので、他の資料との優先順位づけにより公開時期に時差が生じることがあり、すぐにアクセス可能にならないことがあります。国立国会図書館のほうがすぐに公開いただけることが多いので、そちらを案内することがあります。

(会場) 以前ワシントンDCに駐在しておりました。私が駐在していたころは、プランゲ文庫の提供方法がマイクロからデジタル化へ変わる時期でした。テクノロジーの方や前任の方とよくお話をさせていただいたのですが、提供の仕方についてとてもご関心をお持ちでした。国立国会図書館の館内で

の提供方法について、ご感想があればお聞かせください。

(巽) 3月のシンポジウムでの発表の際に、国立国会図書館のデジタルコレクションにプランゲ文庫という項目がある、というのを見せようと思っています。このようなスペシャルコレクションはプランゲ文庫の特権だと思っています。私たちは大学の中という制約がありますので、国立国会図書館で公開していただけるというのは、アクセス数も多いですし、ありがたいことだと思っており、これからも続けていきたいと考えています。

(会場) プランゲ文庫以外にGHQ関係者からの寄贈を受けていらっしゃることを知らなかったのですが、それはプランゲ文庫として収集を積極的にされているのか、たまたま寄贈の申し出があつてなのか、収集方針をお聞かせください。

(巽) 私たちが積極的に探したのではなく、向こうから話をいただいた、というものが多いです。占領期日本といえばプランゲ文庫、という名前が広がりつつあることの証拠かなと思っています。私が着任してからも3件ほどあり、処理中です。ご遺族の方がお亡くなりになる年齢になってきていますが、3人のうち1人は、奥様が日本の女性の労働問題にかかわった方で、このままにしておくのはもったいないという話を周りとしていたときに、たまたまプランゲ文庫の名前を聞いて持ってきた、とご連絡をいただきました。もう1人は、プランゲ博士と祖父が一緒に働いていた、というお孫さんが持ってこられました。プランゲペーパーの中に、その祖父の方のお名前があり、その方のペーパーを1月に寄贈していただきました。この方は、文書をどこに持って行ったらいいか分からなくてウェブサイトで調べたら私の名前が出てきてこちらにいらっしゃった、ということでした。これは、大学アーカイブのほうが適切と判断し、そちらに入れていただきました。3人目の方は、ご主人と一緒に日本に滞在していた方で、日本で撮った写真がたくさんあり、お持ちいただけたという例でした。プランゲ文庫が占領期日本と結びついており、このように持ってきてくださることが分かったので、一般の方にお知らせすることの大切さを感じました。

(会場) プランゲ文庫に直接関係なくても、占領関係の資料は、適宜判断のうへ前向きに受けいられる余地があるということでしょうか。

(異) 日本人の研究者の方などには、貴重な資料であることをご理解いただいておりますが、英語圏で資料の価値を理解していただくのは難しく、ジレンマを日々経験していますので、英文資料が来ると、関連付けて一般の方に広めていける大切な手段になるかと考えています。寄贈者の方も、捨てるのはもったいないがどうしてよいか分からない、という方にとってのプランゲ文庫の存在価値も大きいと思いますので、受け入れられる範囲で受け付けていきたいと思います。

(会場) 2次使用届が提出されて、ご覧になって、認められない例がありましたか。また、出版物やテレビでの放映など色々な形態があるかと思いますが、成果物を納めることになっているのでしょうか。

(異) 認めなかった例は、私の経験ではありません。こちらは著作権の所有者ではありませんので、認める認めないといった権利はありません。使用することをお知らせいただく、というのが2次使用届の目的ですので、提出したら完了、となります。ただし、2次使用届の際に2点お願いをしています。必ず資料所蔵先としてプランゲ文庫の名前を入れていただくことと、出版物の場合は1部コピーをお送りいただくことです。

(会場) 成果物についても管理されていますか。閲覧はできるのでしょうか。映像については納めることを要件としていないのでしょうか。

(異) 成果物は、プランゲ文庫資料がどのように活用されているかという例として置いています。ご興味があれば利用できます。文庫内にまとめて置いています。映像については要件としておらず、事例もあまりありません。

(会場) メタデータの付与について、資料のタイトル・著者名・出版者などは当然とるとして、メタデータを作製する際の特別なルールがありますか。媒体の種類や、政治や行政などの分野などについてのルールなど、工夫されているのでしょうか。また、検索の際の表記ゆれについて、例えば「マッカーサー」「マックアーサー」「マ元帥」などがありますが、どのように判断されていますか。

(巽) メタデータのルールは設けていません。必要な情報、入れておくユーザーの方に役に立つだろうと判断される情報、例えば検閲されたかどうか、検閲資料があるかどうか等の情報を可能な範囲で入れています。ただし、私たちのデータは大学のウェブサイトに掲載することになるので、デジタルサービス課から、こんなにたくさん載せられないとか、日本語だけにするか、日本語と英語いずれを先にするのか等について話し合う必要があります。ルールはありませんが、できる限り役に立つと思われる情報を載せる、という姿勢で臨んでいます。

表記の揺れについては、日本語を英語にしなくてはならないということで、悩むことが多いですが、プランゲ文庫の出版物はOCLC³⁴⁾で調べてそれを一つの基準と考え、できる限りそれに近いものを使用することにしていきます。ただし、OCLCも100%正しいとは限らず、間違っている場合に修正するのかななどを常に話し合い、検索の便なども考慮し、デジタルサービス課と相談して修正したり工夫したりしています。

(会場) 2001年からプランゲ文庫で1年間働かせていただいております。当時、資料の劣化がひどかった記憶があります。特に検閲資料の劣化が見られましたが、保存上のご苦勞についてお聞かせください。また、仮に全資料がデジタル化・マイクロ化されたとしても原資料は保存されていくこととなりますが、今後の展望についてお聞かせください。

(巽) 現在の状態について、検閲資料については劣化が進んだものが多く、マイラー³⁵⁾に入れて絶対に公開しない、ということにして保存しています。デジタル化を進めることで、デジタル画像を見てください、ということになりますので、デジタル化したものは原資料を公開しない、という方針を貫いています。

34) Online Computer Library Center の略。アメリカ合衆国の非営利団体で、世界各国の図書館、教育・研究機関等をメンバーとした世界最大の図書館サービス組織。OCLCが提供する書誌データベースWorldCatによってOCLC参加館所蔵資料の検索が可能。

35) ポリエステル製の資料保護用透明フィルムでできた、書類収納用フォルダ。

(会場) 1997年に一度お邪魔しました。利用者の立場からお伺いします。デジタル化・マイクロ化を進めるにあたり、インターネットで海外でアクセスができるようにするなど、どの程度公開されるご予定でしょうか。また、著作権の処理をどうされているのかお尋ねします。

(巽) インターネットでの公開ということに関しては、現在はキャンパス内ではすべて見られる、という形の公開であり、制限になっています。アメリカで日本の資料をアクセス可能にすることに関しては法的知識が必要ですが、プランゲ文庫にそれを行う余裕はなく、大学内においてもプランゲ文庫は特殊な扱い、ということで、無難な道をとっています。著作権に関しては、資料をプランゲ文庫やキャンパス内で見ただく場合は問題ないですが、研究者の方が自分の出版物に使用する場合に問題になるわけです。それは私たちというよりは研究者個人の責任になるという考え方です。これは日本に限らず、アメリカで資料を使う場合でも、アーキビストや司書がそれに対して責任を負うことはなく、研究者個人にお任せしています。

(会場) 私たちは利用者の方と対面して日々提供しており、デジタル画像のアクセス数などはわかりますが、デジタル化の進行とともに、利用者の方と直接やり取りする機会が減ってくる気がしており、研究成果についてはこちらも確認していかなくてはならないと思っています。レファレンスについて、どのような方法・内容で行っていますか。

(巽) レファレンスはほとんどメールで受けており、サイト上のフォームに書いていただくとこちらに届きます。内容は様々で、資料があるかという所蔵確認、2次使用届の書き方に関する質問、プランゲ文庫で研究する際に助成金が出るか、等の基本的な内容が多く、かなりのレベルでウェブサイト上のコンテンツ紹介で解決するものが多いです。深い入り組んだ質問については、研究者自身がお調べになることが多いかと思いますが、さほど多くありません。

(司会) 本日はどうもありがとうございました。

(たつみ ゆかこ　メリーランド大学プランゲ文庫室長)